

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

広東客家地域の墓地景観：  
広州との比較より （特集：遺骨の処理と葬送）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5230">http://hdl.handle.net/10502/5230</a>

〔論文〕

●特集「遺骨の処理と葬送」

## 広東客家地域の墓地景観

——広州との比較より——

河 合 洋 尚

### 1. はじめに

中国では近年、火葬の徹底化が促進されているだけでなく、骨の収納方法も政策的に規制されるようになってきている。中国では伝統的に、土葬、天葬、樹木葬、懸棺葬などさまざまな葬儀がおこなわれてきたが、基本的には民衆の意図やしきたりに沿って死体や遺骨が処理されてきた。しかし、近年では火葬した遺骨を指定の霊園、公共墓地、またはコインロッカー式の納骨堂に収めさせる傾向が都市部を中心に強まっている。こうした遺骨管理の政策的な規制は、中国で最も経済発展の進む省の一つである広東省では普遍的にみられる。広東省では伝統的に土葬が中心であり、経済的な問題さえ許せば、遺骨は、沖縄の亀甲墓にも似た個人墓（一族の祖先を共同で埋葬した墓も含む）に埋葬されてきた。しかし、近年の広東省では個人墓の建設は抑制されており、時として移転や破壊が進められている。

ただし、同じ広東省といっても、遺骨と墓地の管理への規制は全く同じであるわけではない。たとえば、広東省の省都である広州では、1990年代以降、山地や農地の景観を乱すという理由から、個人墓の破壊や移転が大規模におこなわれてきた。それにより、数世代前の祖先の遺骨ですら、霊園や公共墓地に移転させられるという事態が発生した。他方で、広東省東北部の山岳地帯にある梅州では、個人墓を新たにつくることこそ禁止されたものの、政府が既存のそれを撤去する事態にまでは進んでいない。梅州では、仏教寺院や開発業者が管理する公共墓地に遺骨を埋葬する傾向が現れているが、公

共墓地や納骨堂に埋葬されるのは比較的最近に亡くなった者の遺骨が中心である。また、梅州では遺骨管理や墓地管理に対する規制が広州に比べると緩いため、民衆はさまざまな工夫を凝らして、埋葬をめぐる慣習的な観念やしきたりを新たな墓地制度に投影させることが可能になっている。その結果、梅州では、遺骨の収納をめぐる多様な形態が出現するようになっている。

本稿は、そうした梅州における遺骨収納の多様性とその背後にはたらくポリティクスを、現地調査に基づき報告するものである。梅州は、客家と呼ばれる漢族のサブ・エスニック集団が集住する地として知られている。筆者は、2004年11月から2007年度に至るまで梅州にて中・短期のフィールドワークを繰り返し、その後、2008年3月から2010年1月まで現地の研究機関（嘉応大学客家研究所）に勤務しながら長期の参与観察をおこなった。本稿は、この期間に収集したデータに基づき、墓地景観という切り口から整理を試みる。そのうえで、広州の事例と比較することで、墓地景観の形成とポリティクスについて初歩的な考察をおこなうことにしたい。

## 2. 梅州の地域概況——客家、客家文化および遺骨の管理

本題に入る前に、梅州と客家をめぐる概況を説明しておく。

広東省は中国の南部に位置しており、図1にみるように、東は福建省と、北は江西省および湖南省と、西は広西チワン族自治区と隣接している。そのうち省都である広州は広東省の中部に位置しており、梅州は広州から東北に約400km離れた山岳部に位置している。広東省は約99%が漢族であるが、文化・言語などの側面から広府人、客家人、潮汕人という3つの集団に分けられ、これら漢族のサブ・エスニック集団は学界では「民系」または「族群」と呼ばれる。

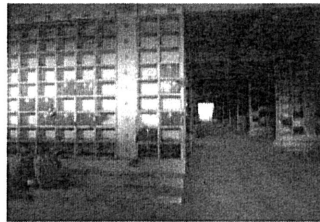
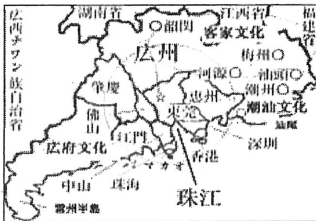
図1を見ると明らかであるように、広州が広府民系の地であるのに対し、梅州は客家民系の集住地であると考えられている。客家は、広東語ではなく客家語を話す他、風水、義塚や三山国王への信仰を重視する特異なエスニック集団であるとする学者もいる [cf. 高木 1991]。

梅州は地理的には山岳部に位置しており、交通の不便さなどの要因から

貧困な地区であり続けた。改革・開放政策後の広東経済を調査したエズラ・ヴォーゲルによると、1980年代の梅州は広東省でも突出して貧しい地区の一つであった [ヴォーゲル 1991:316-322]。それゆえ、当時の梅州は、中央政府だけでなく、国外（香港・マカオを含む）に住む親戚の援助を必要としていた。そうしたなか、1980年代末より梅州市政府が重視するようになったのが「客家」という名のブランドであり、客家の団結力や文化を利用して海外の客家華僑を引き寄せ、経済発展を促す方針を立てた [彭 2009:5-6]。今では、梅州の政府やマス・メディアは梅州が「世界客都」（世界における客家の都）であると宣伝しており、客家の精神と文化に溢れた地域であることを強調している。さらに、1980年代末に台頭しはじめた中国客家学は、風水や二次葬や義塚など、遺骨の収納に関する習俗を、客家文化と関連して捉えるようになった [河合 2007]。

こうした梅州の地域史のなかで、政府が表立って遺骨管理に干渉するようになったのは、1949年に共産党政府が樹立してからのことである。ただし、北京では1950年代から火葬を奨励し土葬と封建迷信を撲滅するキャンペーンを推し進めていたのに対し、梅州で火葬場が設置されたのは1970年代に入ってからのことであった [角南 2008:164]。現在、梅州には6つの火葬場があり、2005年には梅州の火葬普及率は91.2%にまで達した。中国全土における2005年の火葬普及率が53%であったというから、梅州は火葬が行き届いた地区であると言える [角南 2008:164]。

火葬の普及とともに、梅州では公共墓地の建設も進められた。たとえば、都市近郊では、1996年11月に南榕庄公共墓地が、2002年8月に仙鶴公共墓地が開業し、それぞれ企業によって管理されている。また、日本と同様



左) 図1  
広東省における  
民系分布図

右) 写真1  
コインロッカー  
式の納骨堂

に仏教寺院が遺骨を管理するようにもなっている。千佛塔のような大規模な仏教寺院では写真1に見るようなコインロッカー式の納骨堂もつくられ、墓碑のある墓に埋葬する費用をまかなえない人々の骨を安価で置くことができる。コインロッカーには死者の顔写真や花束が置かれることがあり、子孫はここにやってきて死者を偲ぶことができる。

このように、近年の梅州では、土葬から火葬へと移行するとともに、公共墓地や納骨堂への転換が図られるようになってきている。しかし、こうした急激な変化は、埋葬をめぐる旧来の観念と衝突するようにもなっており、それにより民衆は、遺骨や墓地をめぐる新たな管理方式の合間を縫って旧来の埋葬観念を持続させようとしている。以下では、そのいくつかのパターンを見るとしよう。

### 3. 客家民衆による墓地景観のポリティクス

#### (1) 古い個人墓の修築

繰り返し論じるように、広東省では現在、写真2に見る個人墓を新たに建設することが禁じられている。しかし、政策的に禁じられているのは、「新たに建設する」ことであって、「修築する」ことではない。それゆえ、近年、個人墓を修築し、遺骨をここに納める傾向が現れている。

そのなかで注目に値するのは、使われなくなった個人墓を別の宗族が発見し、彼らの祖先の墓として修築・利用する傾向である。たとえば、筆者が参与観察をおこなってきたZ氏では、近年、『族譜』（家系図）に書かれている祖先の墓の描写を参考にして、「失われた」祖先の墓を探し求めてきた。具体例を挙げると、Z氏には第四世の墓がなかったが、『Z氏族譜』には、第四世の墓は「獅子の首輪の鈴に似る」という記載があった。そこで、Z氏は、獅子の形状に似た山を探し出し、その首に位置するさびれた墓を第四世のものとして断定。すぐに第四世の墓として修築した。この墓が果たして本当にZ氏第四世のものかは定かではないが、このような手段を通してZ氏は新たな個人墓を手に入れ、遺骨を新たに収納することが可能になった。梅州には誰の者か分からず捨てられた墓が少なくないが、以上のような手



左) 写真2  
梅州における個人墓

右) 写真3  
個人墓の修築と利用

段を通して個人墓は再生産されている。

個人墓に骨壺を埋める理由は、死後も子孫代々に崇拜されると考えてのことだが、その他にもいい「風水」を享受できるというメリットがある。筆者が聞いた話によると、個人墓の「風水」をみる際には以下の3点に注意しなければならない[河合2008]。

(A) 写真2にみるような墓の形態そのものが重要である。ちょうど椅子に座るような形をしており、そこから景色を眺めることができる。後方はやや高く、前方には川や木など眺めの良い景色がなければならない。良い景色を眺めていれば祖先は快適に感じ、子孫に繁栄をもたらす。

(B) 方角は羅針盤を見るが、より重要なのは前方に流れの緩い川があることである。また、遺骨(とりわけ頭蓋骨)は、前方の眺めの良い景色が見られるように、前方を向いていなければならない。

(C) 墓碑の寸法を測らねばならない。最も重要なのは墓碑の横幅、次は墓碑の高さ、そして墓碑の奥行きである。墓碑の測量方法は二通りある。すなわち、墓碑の横幅と高さは「合生老」の手法を使い、奥行きは8尺か9尺など縁起のいい数に合わせるようにする。

インフォーマントの話によると、「合生老」は、もはや高齢者しか知らない梅州の慣習的な測量法である。たとえば、第1尺は「生」、第2尺は「老」、第3尺は「病」、第4尺は「死」、第5尺は「苦」、第6尺で「生」に戻る。そのうち特に二巡目以降の「生」と「老」は特に良く、これらを合わせた寸法を「合生老」という。だから、「合生老」の測量方法を使う場合、6、7、11、12、16、17尺に合わせると吉祥であると考えられている。

こうして個人墓は、郊外の山地や荒地にある場合は、宗族の慣習的な観念を通して再利用されることがある。しかし、それが都市のなかにある場合は、

空間利用の面でも景観整理の面でも撤去すべき対象となりやすい。特に、他人から見れば墓は不気味な存在に見えるから、なおさらである。しかしながら、墓を管理する一族にとって、墓は自己に禍福を与えてくれる重要な存在であるから、容易に移転させることはできない。そこで、筆者が話を伺ったY氏のように、墓とその祭祀儀礼を「客家文化高揚」の名目でおこない、それが人目を引くべき景観であると逆にアピールしている例もある。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
生	老	病	死	苦	生	老	病	死	苦
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
生	老	病	死	苦	生	老	病	死	苦
合生老					合生老				

図2 「合生老」



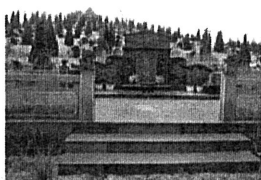
写真4 秋祭りの様子

都市部に位置するY氏の墓は、約1000年も前の宋代に建てられたと考えられており、Y氏は、それ自体を観光資源としようとして試みている。そして、春祭りと秋祭りを客家文化の名目で開催し、写真4にみるように、獅子舞でもって祖先祭祀をおこなっている。また、Y氏の主宰で学術シンポジウムを開き、墓地とその儀礼が客家文化の重要な資源であることを強調するようになっていく。このように、21世紀に入った後も、梅州では、あらゆる工夫を凝らして個人墓を修築・保存しようとする動きがまだ根強い。

## (2) 公共墓地における隠された工夫

上述のように、近年では梅州で公共墓地が経営されるようになり、個人墓だけでなく、公共墓地でも遺骨が埋葬されるようになっていく。公共墓地は一見したところ新たな墓地制度であるように見えるが、「風水」のような埋葬をめぐる慣習的な観念は公共墓地にも色濃く反映されている。

たとえば、写真6のような公共墓地のなかの墓を購入する際、高低や周囲の自然が考慮されることがある。一般的に周囲に木や水があると「風水」が良いとみなされるので、自然環境のいい墓地が売れやすくなる。また、埋葬者の生年月日を考慮して方角が定められることもある。それゆえ、写



左) 写真5  
現代梅州の公共墓地

右) 写真6  
公共墓地の墓と墓碑

真6に見るように、公共墓地のなかの墓は、必ずしも同じ方角を向いているとは限らない。先述した南榕庄公共墓地や仙鶴公共墓地の多くの墓はわずかに異なった方角を向いているが、それは風水を考慮して建てているからであると聞く。

もちろん、梅州の民衆は全く同じ基準から墓の「風水」をみることはなく、他の基準からも墓の良し悪しが判断されることもある。その判断方法の一つが、先述した「合生老」である。公共墓地において「合生老」は、主に二つの側面で使われている。

その第一は、墓の位置である。公共墓地は、縦横にだいたい同じ形の墓が並んでいる。そのうち、下から上に数えて「合生老」にあたる墓、および右から左に数えて「合生老」にあたる墓は縁起がいいと考えられている。例を挙げると、下から数えて11列目、右から数えて7列目の墓は、「合生老」の基準からすると非常にいい墓だということになる。

第二は、墓碑の数も「合生老」であると理想的だとされる。たとえば、墓碑に「顯祖考□仁廉志案李公之墓」という文字を刻むと、12文字であるから「合生老」ということになる。このように墓碑の文字を調整することで、墓の風水を向上させる試みもなされている。

ただし、公共墓地の墓は金を出して購入しなければならないので、金銭的に余裕のない者は、公共墓地にて墓を買うことができない。その場合は、安価で購入できるコインロッカー式の納骨堂に遺骨を取めることになる。

### (3) その他の遺骨収納

以上に説明した遺骨の収納方法は、墓に関するものである。だが、梅州でフィールドワークをしている最中に目についたのは、墓ではなく、遺骨



を骨壺に入れて安置するケースが少ないことである。写真7は、遺骨を骨壺に入れて、埋葬したものである。繰り返す述べるように、広東省では新たに個人墓を建造することは禁止されているが、現地では、「風水」の良いところに埋葬したいとする観念が強い。そこで、墓碑のある個人墓そのものこそ建造していないものの、個人墓の形状に似せて後方の土を盛り上げた仮の個人墓をつくり、骨壺を収めている。

この骨壺を埋めたX氏によると、「風水」の良い地点を選ぶだけでなく、骨壺のなかの遺骨の置き方も重要である。具体的には、骨壺のなかの遺骨は、脚を一番下に置き、そのうえに骨盤、肋骨、咽喉仏を積み上げていく。そして、一番上に頭蓋骨を置き、頭蓋骨は前方の景色が見えるように置く。すなわち、人体を模して骨を積み上げるとともに、死者が前方の景色を見て快適に過ごせるよう工夫するのである。墓碑こそないものの、前述した個人墓の「風水」と同じ工夫を凝らしているところに、慣習的な観念としきたりが色濃く残っている側面を見ることができる。

ちなみに、梅州においては、無縁仏の埋葬も丁重におこなわれている。古くは義塚という、戦死者を祀る墓地があり、現在の梅州では少なくとも2件が確認されている。そのうち1件は梅江区黄坑村にあり(写真8)、もう一つは同じ梅江区的書坑村にある。また、写真5にみるように、公共墓地においても義塚は設置されている。伝説のうえでは義塚は元朝など異民族の統治に反旗を翻した客家(漢族)軍人の墓だと言われるが、開発の途中で見つけた人骨を集めて建造した墓であるとか、処刑者をまとめて葬った墓であるという説明を聞くこともある。義塚は近年、客家の代表的な景観であると表象されている。たとえば、黄坑村の義塚は、2008年度以降、「義塚」の看板が掲げられただけでなく、義塚へ至る道も整備されて見学が容



左) 写真7  
墓碑のない個人墓

右) 写真8  
梅江区黄坑村の義塚

易になった。

#### 4. 考察——広州との比較において

このように、梅州では、火葬の制度化、公共墓地の建設、納骨堂の設置が促進されたが、他方で、個人墓における祖先祭祀への執着、「風水」の重視といった慣習的な観念が色濃く残されている。近年の梅州では、「世界客都」としての宣伝を推し進めるなかで、客家らしい景観を残しつつ開発を進める方針を打ち出しているが、そのなかで、景観を乱さないように個人墓の乱立にも抑制をかけている。すでに述べたように、山地や郊外の個人墓はまだ撤去されずに残されているが、それでも都市部に乱立する個人墓は開発の途中で撤去されることもある。それに対して、民衆側は、時として個人墓とその祭祀をむしろ客家文化として領有することで、個人墓を守ろうとしている。

梅州の事例から判明したのは、政府やマス・メディアが宣伝する客家らしい景観とは別の角度から、すなわち親族や風水をめぐる旧来の観念から別様に景観を捉えていることである。それゆえ、新たな墓地制度のもとにあっても、可能範囲内で旧来の観念やしきたりを連続させ、時として政策的な景観像を逆利用している。近年、景観をめぐる人類学的理論は、こうした政策的に生み出された景観像に対する、民衆側のポリティクスに着目している [Bender ed. 1993; Hirsh and O'Hanlon eds. 1995; Stewart and Strathern eds. 2003; 河合 2009]。墓地景観のポリティクスに関しては、形こそ違えど広州にも存在する。

冒頭で論じたように、広州は梅州と同じ広東省に位置しているが、墓地をめぐる政策的態度には違いがみられる。広州では、1990年代半ばより生態都市の概念を提起するようになり、景観面でのコントロールが強化された [李・周 2005]。広州にて実施した聞き取り調査によると、政府が山地や田畑における個人墓を強制撤去しはじめたのも、およそ1990年代半ば以降である。広州の南部に位置する番禺区S鎮では、政府が民衆の祖先の墓を無理やり掘り起こし公共墓地に遺骨を収納したというので、民衆は常に

怒りと不満を口にしていた。中国では、祖先の墓を荒らすという行為は、その家族の風水を破壊し、陥れるために使われてきた手法でもある。

筆者は2005年9月から2008年2月まで、番禺区S鎮と都市部にて長期のフィールドワークをおこない、その過程で墓や遺骨収納の方法についても聞き取り調査をおこなった。筆者が見聞した範囲内では、個人墓は一部まだ撤去されずに残されていたが、いつ撤去されてもおかしくない状況にあった。例を挙げると、都市部である荔湾区にはまだ撤去されてない宗族の墓が1つあり、この宗族は、清明節や、春節の獅子舞儀礼（これを「醒獅」という）のときには必ずこの墓を参拝する。しかし、ここの社区の約8割は外地からの移民が住んでいるので、気味が悪いという理由から撤去を求めている。

筆者が観察した限り、広州人の絶対的多数は、遺骨を公共墓地、納骨堂、霊園、あるいは道教・仏教施設に預けていた。梅州に比べると広州の墓地管理は徹底しているため、写真7に見る墓碑のない仮の個人墓は現段階でもまだ確認できていない。また、無縁仏を義塚に埋める行為は、潮州や汕頭など潮汕地域では容易に確認することができるが、広州ではまだ見たことがない。だが、公共墓地に風水などの観念を投影させようとする点は、内容こそ違いが広州でも認められた。その詳細は以下の通りである。

まず、広州の公共墓地では、梅州と同じく、周囲に木や水があると風水が良いとみなされる傾向にある。また、死者の生年月日に合わせて墓地の向きを考慮するので、若干向いている方角にズレがある。このことは、広州の国営公共墓地である銀河霊園でも確認することができる。そして、場合によっては、墓碑の寸法も縁起のいい数に揃えられることがある。たとえば、比較的裕福な家族は、公共墓地の墓を複数買い取って1つの大きな墓をつくり、墓碑の横幅、高さ、奥行きを縁起のいい数字に合わせていた。筆者が確認した限りでは、「合生老」の手法こそ見られなかったが（ただし潮汕地域ではすでに確認している）、8や9の数字に合わせてたり、魯班尺を使ったりする手法は確認できた。

以上の事例から、広州においても、政策的な意図とは別様の観念から、墓地景観が再構築されていることが明らかである。また、広州では、限ら

れた範囲内で個人墓が文化財として保存され、墓参りの様子が伝統文化として視覚化されることもある。

写真9は、広州の宗族による清明節の墓参りの様子である。この墓は、広州のある生態公園のなかに文化財として残されており、毎年、清明節になると、宗族が集団で墓参りをする事が許されている。ただ、この墓参りは、公園のなかにあるため対外的に開放されており、学者やマス・メディアが伝統文化として取材し、宣伝することもある。梅州のY氏が客家文化を利用して個人墓への参拝を持續させていたように、ここでも伝統文化としての言説を確保することで存続が可能になっている。



写真9 清明節の墓参りの様子

## 5. おわりに

以上にみるように、同じ広東省に位置していても、遺骨管理をめぐる政策的態度の違いにより、建造物としての墓地のあり方には違いがみられる。比較的規制の緩い梅州においては、さまざまな形態の墓（あるいは遺骨収納所）が存在しており、いわば遺骨管理の多元化ともいうべき現象が認められる。それに対して、広州では、個人墓はごく限られており、霊園、公共墓地、納骨堂への移行が顕著に認められる。

しかし、他方で、梅州と広州の双方の地において、墓地景観をめぐるポリティクスが存在していた。梅州と広州の政府は各地の伝統文化を利用した景観開発をおこなっており、その一環として「不気味な」墓地は規制される傾向にあった。しかし、墓地は、外から見れば不気味であっても、一族の者から見れば祖先との系譜的・霊的なつながりを確認できる重要な存在である。だから、民衆側は自分たちの墓を「風水」などの慣習的な観念から捉えなおし、墓地景観をつくり直すのである。こうした墓地景観の再構築は目には見えにくいだが、民衆側にとってはこうしたわずかなズラしこそが重要な意味をもっている。

本稿では、梅州と広州の事例を比較することで、墓地景観のポリティクスをめぐる視座を提示した。この視座をどのように発展させていくかは、今後の課題である。

## 注記

本稿は、広東省人文社会科学省／市共建重点基地嘉应学院客家研究院招標課題「現代『客家文化』観の形成とその民間社会における形成」(10KYKT08)の資金援助を受けて完成させたものである。

## 参考文献

- Bender, Barbara (ed.) 1993 *Landscape: Politics and Perspectives*. Oxford: Berg
- Hirsh, Eric and M. O'Hanlon (eds.) 1995 *The Anthropology of Landscape: Perspectives on Place and Space*. Oxford: Clarendon Press
- 河合洋尚 2007 「客家風水の表象と実践知——広東省梅州市における囲龍屋の事例から」『社会人類学年報』33号、65-94
- 2008 「梅州地区的風水与環境観——囲龍屋、現代住宅、墳墓為例」『客家研究輯刊』32号、171-181
- 2009 『相律する景観——中国広州市の都市景観再生をめぐる人類学的研究』東京都立大学博士学位申請論文
- 李 大華 (Li Da-hua)、周翠玲 2005 『広州的深度組合』広東教育出版社
- 彭 兆荣 (Peng Zhao-rong) 2009 「帝国辺陲政治地理学对客家文化的影响——以福建寧化客家〈祖地〉建構為例」『客家研究輯刊』33号、1-9
- 志賀市子 2009 『中国粵東地域における無縁の死者祭祀の偏差・伝播・歴史的変遷に関する民俗学的研究』文部省科学研究費補助金成果報告書(課題番号: 18520628)
- Stewart, Pamela. J. and Andrew Strathern (eds.) 2003 *Landscape, Memory and History*. London: Pulto Press
- 角南聡一郎 2008 「梅州地区近当代墳墓の状況——従与日本、台湾的比較視点」『客家研究輯刊』32号、160-170
- 高木桂蔵 1991 『客家——中国の内なる異邦人』講談社新書
- ヴォーゲル (Vogel)、エズラ・F 1989 『中国の実験——改革下の広東』(中島嶺雄訳)ダイヤモンド社
- 渡邊欣雄 2001 『風水の社会人類学——中国とその周辺比較』風響社